

環びわ湖

大学地域交流フェスタ 2023



環びわ湖大学・地域コンソーシアム

活動報告会プログラム

11月26日(日)

10:00～12:00<予定>

会場:オンライン(ZOOM)で実施

主 催：一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム
〒520-0056 大津市末広町 1-1 日本生命大津ビル 4階
TEL：077-526-8850 FAX：077-526-8851
e-mail：info@kanbiwa.jp <http://www.kanbiwa.jp/>

ごあいさつ

滋賀県内の全14大学・短期大学と7自治体、1経済団体が正会員として加盟する「環びわ湖大学・地域コンソーシアム」は、大学と地域が連携してさまざまな事業を実施しています。そのひとつである大学地域連携課題解決支援事業は、大学のゼミ等がコンソーシアムに加盟する自治体の地域課題解決に向けて、地域住民の方々と共に実施する教育研究や地域活動の取り組みを支援する事業です。

本年度は、昨年度からの継続6件、今年度からの新規7件、あわせて13件のプロジェクトを採択し、各々活動しているところですが、本日はその中間報告をオンラインで行います。また、最後には今年度の学生支援事業「SDGsワークショップ～滋賀のサーキュラーエコノミーの実践～」の報告もあります。

各プロジェクトから、工夫を凝らして活動ができたところはその内容と今後の予定を、また活動ができていない場合には今後の予定や実施に向けての検討結果や計画を紹介していただきます。互いの工夫や計画を情報共有することで、それぞれの活動を振り返りと改善につなげられるようお願いいたします。

滋賀県内各地域の課題に対して、若い大学生の発想力や行動力を活かして取り組むことによって、学びの機会を創り出し、それをより深め、更には地域への意識が変わり、より愛着を持ってもらうことがこの事業が目指すところです。滋賀の豊かな地域づくりにとって、本コンソーシアムは重要な役割を引き続き担えるよう、本日が意義深い催しとなることを期待します。

2023（令和5）年11月26日

一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム
理事長 仲谷善雄（立命館大学学長）

■プログラム（概要）

1. 開会（10:00）
2. 環びわ湖大学・地域コンソーシアム 大学地域課題解決支援事業活動中間報告、学生支援事業部会報告
3. 閉会（12:00<予定>）

環びわ湖大学・地域コンソーシアム
大学地域連携課題解決支援事業、学生支援事業 活動報告

1. 草津市×立命館大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
キャンパス周辺の地域資源を活かしたウォークアブルなまちづくり
2. 彦根市×成安造形大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
彦根マラリアートプロジェクト
3. 大津市×成安造形大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
ムダモルフォーゼプロジェクト（店舗から排出されるゴミ問題に着目したアップ
サイクルデザイン）
4. 東近江市×びわこ学院大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
「手をあげて わたろう」運動啓発のダンスや歌の練習を通して、交通ルールを
身につけ日常生活に実践できるようにする。
5. 滋賀県×びわこ学院大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
「親子で考えよう！今どきのコミュニケーション」安全なペアレンタルコントロ
ールの啓発活動
6. 大津市×びわこ学院大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
科学館事業に参加をする子どもたちと大学生の関わりの在り方を求めて－大津市
科学館とびわこ学院大学との連携－
7. 長浜市×長浜バイオ大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
余呉の自然をもっと発信して、もっと繋がる～地域振興へ電子顕微鏡の挑戦
8. 東近江市×びわこ学院大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
地域イベント「コトナリエサマーフェスタ」における、親子イルミネーションづ
くりワークショップ
9. 東近江市×びわこ学院大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
博物館の収蔵資料・展示事業を子どもたちに役立てるための、学生参画と道徳
科・社会科の地域教材作成
10. 東近江市×びわこ学院大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
誰もが使いやすい交通環境実現に向けたリ・デザイン
11. 大津市×滋賀短期大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
大津市無形民俗文化財「大津絵踊り」の3Dデジタル化プロジェクト
12. 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学・・・・・・・・・・・・ 27
山間部に暮らす高齢者と共に考える LIFE～健康いきいき作業療法プロジェクト～
13. 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学・・・・・・・・・・・・ 29
いきいき生活プロジェクト 2023-24～体力チェックで健康寿命を延ばしましょう～
14. 学生支援事業「SDGs ワークショップ：滋賀のサーキュラーエコノミーの実践」
成果報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

No.1

プロジェクト名（活動テーマ）： キャンパス周辺の地域資源を活かしたウォーカブルなまちづくり 〔SDGs 目標番号：3,11〕	
提案者	：立命館大学 工学部 准教授 阿部 俊彦
自治体担当者	：草津市 都市再生課長 長谷川憲一
連携大学担当者	：立命館大学 工学部 准教授 阿部 俊彦
発表者	：立命館大学大学院 理工学研究科 修士2年 山際 綾

1. 取組体制

草津市都市再生課、草津未来研究所、エリア内の学区の地域住民（まちづくり協議会のメンバーほか）、民間企業、立命館大学阿部研究室で連携を図った。役割分担として、地域住民が主催のイベントに、大学の学生チームが参加した。社会実験の企画及びその結果の分析は、民間企業のアドバイスを頂きながら大学が実施した。行政は、具体的な施策の具体化につなげていくために調整及び地元のまちづくりサポートを行った。

2. 背景・目的

草津市では、「南草津ビジョン」の柱の一つとして、「歩いて暮らせるまち（＝ウォーカブルタウン）の実現」が課題としてあげられている。その推進のための具体的な取り組みとして、令和4年度は、ウォーキングマップの作成を通じて地域の課題を把握した。

3. 動内内容

「南草津ビジョン」エリア内のひとつの学区を対象として、歩いて暮らしていくための課題を把握するために、2022年の秋に実施された志津南学区の健康推進員連絡協議会が主催するウォークラリーイベントに、学生チームが参加し、ウォーキングマップを作成した。さらに、ウェアラブルウォッチを用いた社会実験を試行した。

3-1. ウォーキングイベントに参加し、ヒアリングの実施

定期的に地域で行われるウォーキングイベントに参加し、地域住民の方々に日頃の散歩事情についてヒアリングを行なった。ヒアリング内容を図視化し、意見の整理を行なった。



3-2. ウェアラブルウォッチで取得したデータの整理

ウォーキングイベントの際に学生がウェアラブルウォッチを着用し、健康推進員連絡協議会で
行われるウォーキングイベントの歩行距離や消費カロリー、タイムなどを計測した。

取得したデータをもとに図視化しデータの整理を行なった。

3-3. ウォーキングイベントで得た意見・データをもとにウォーキングマップを作成

ヒアリングで得た意見、そしてウェアラブルウォッチで得たデータをもとにウォーキングマ
ップの作成を行なった。ウォーキングマップは3つのエリアに分け、歩行距離や高低差、また
まちの魅力など、様々な観点から各エリア3つのコースそれぞれ作成し提案した。



3-4. ワークショップで得た意見の整理

ワークショップを開催し、作成した3つのウォーキングマップについて、地域住民から意見
をいただき、図視化し整理を行なった。



4. 成果と課題、今後の取組

地域住民へのヒアリング、アンケート調査そしてウェアラブルウォッチのデータを用いたウ
ォーキングマップづくりを通して、地域住民の健康の推進と同時に、今後、若草地区の住宅地で
の地域資源や課題などを整理できた。

課題として、ウォーキングマップが完成したまでにとどまっているため、今後は、歩いて暮ら
せる住宅地のあり方を提案したい。また、今回学生で計測を行ったウェアラブルウォッチを次回
は地域住民に着用していただき、そのデータをもとにより地域に寄り添った社会実験を行い、次
年度は、本格的に実施したい。

No.2

プロジェクト名（活動テーマ）：彦根マラリアートプロジェクト 〔SDGs 目標番号：4〕	
提案者	：成安造形大学 教授 宇野君平
自治体担当者	：彦根市歴史まちづくり部文化財課 主任 斎藤一真
連携大学担当者	：成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 助教 田口真太郎
発表者	：成安造形大学 1年 谷彩未

1. 取組体制

- 彦根マラリアートプロジェクトチーム：成安造形大学 未来社会デザイン共創機構の担当教職員が、対話型鑑賞に関心のある学生を選抜して組織。
- 成安造形大学 未来社会デザイン共創機構：学生の研究活動のサポートと、企業や地域との連携支援を教職員でサポート。
- 彦根市：資料等の情報提供、ワークショップへの協力。

2. 背景・目的

彦根マラリアートプロジェクトは、彦根城旧外濠の歴史と現代アートの融合を通じて、地域の課題と向き合い、新しい価値を創造する取り組みです。本ワークショップは、市民、学生、専門家を含む多様な参加者と共にアート作品《濠と瘡》を中心とした対話型鑑賞会を体験することで、アートを通じたコミュニケーションの可能性や地域の歴史への新しいアプローチを探る場として開催されます。参加者同士の意見交換や専門家からの解説を通じて、彦根市の歴史や現代アートへの理解を深めることを目指しています。

3. 活動内容

○令和5年度の活動概要

令和4年度に実施した対話型鑑賞会の成果を踏まえて、令和5年度は実施プログラムをブラッシュアップした上で、継続し取り組む。鑑賞者のマラリア対策に関する知識の有無や、年代や属性によって対話の質が変化することから、それらの違いをつなぐ役割として大学生がコミュニケーターとして役割を發揮できるよう、小グループでの意見交換の進め方や対話スキルの向上にも注力していく。

○スケジュール

- 9月23日 ワークショップ（滋賀大学陵水新聞会 対象）
- 12月9日 ワークショップ（彦根ボランティアガイド協会 対象）
- 1-2月 振り返り・活動結果のまとめ

4. 成果と課題、今後の取組

○成果

- 今年度の1回目の彦根マラリアートプロジェクト(対話型鑑賞会)は、令和5年9月23日、彦根銀座街商業協同組合の協力のもと、同商店街のCafeteria Azzurro(2Fカフェスペース)で開催された。
- 全体で2時間のイベントの流れは、開場・受付から始まり、開会挨拶と作品紹介(15分)、映像作品の鑑賞(50分)、対話型鑑賞会(35分)、そして全体共有と閉会挨拶(20分)で締めくくられた。
- 参加者は、大学生(滋賀大学8名、成安造形大学1名)と、一般(5名)の、合計14名が参加。
- このワークショップは大学生を中心に実施。彦根市に馴染みのない参加者も迎え、地域やマラリア対策の歴史や知識を共有するとともに、現代アート作品《濠と瘡》を通じて対話型鑑賞会を行なった。

○考察

- 映像作品を用いた対話型鑑賞は効果があったが、さらに市民や専門家の参加を促進する方法が求められる。
- 令和4年度は地元高校生や自治会が対象だったが、今年度は滋賀大学学生が中心。そのため、地域に詳しくない参加者からの地域情報への質問が多かった。
- 対話型鑑賞では、地域情報だけでなく、感染症対策や当時の世相、映像に関する感想などを共有する必要があり、それに合わせた工夫と改善が必要。
- 鑑賞時に地図やレジュメなどの補足資料を提供することも検討すべきだが、地域の知識よりも対話を通じた新しい発見が重要。
- アンケート結果は5段階評価で4以上と高く、特に小グループでの意見交換が評価された。また、参加者からは鑑賞後の街歩きの要望が多かった。

○今後の取組

- 令和5年度12月9日(土)には、彦根市ボランティアガイド協会のガイドさんたちを対象としたワークショップを実施予定である。その後、1-2月に振り返り・活動結果のまとめを行い、今後の本活動の方向性や展開を検討・計画していく予定。

No.3

プロジェクト名（活動テーマ）：ムダモルフォーゼプロジェクト （店舗から排出されるゴミ問題に着目したアップサイクルデザイン） 〔SDGs 目標番号：12〕	
提案者	：成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 助教 田口真太郎
自治体担当者	：大津市環境部廃棄物減量推進課 3R推進係 白井智浩
連携大学担当者	：成安造形大学 研究・連携支援課 宮崎瑛圭
発表者	：成安造形大学 2年 宮下 樹

1. 取組体制

- ・ 成安造形大学：プロジェクト演習科目（授業）のテーマとして授業履修者と有志を募りプロジェクト実施
- ・ 成安造形大学 未来社会デザイン共創機構：学生の研究活動支援と、企業や地域との連携を支援する教職員チーム
- ・ 大津市：SDGs 推進に係る取り組みの情報提供および広報協力
- ・ 旧イズミヤ堅田店：資材提供、取材や調査等への協力（令和5年1月閉店）
- ・ エイチ・ツー・オーリテイリング(株)サステナビリティ推進部：アパレル業界に関する取材および作品制作への協力
- ・ 阪急梅田百貨店：展示販売会のサポート

2. 背景・目的

大量生産と大量消費のアパレル業界において、売れ残り商品の廃棄が問題となっている。不用品に新たな価値を生み出す「アップサイクル」を推進していくために地域の販売店と連携し、廃棄物からアートを生み出し未来の作品づくりに取り組む。学生クリエイターが制作した作品を実際に店舗で展示販売にも取り組むことに挑戦する。

3. 活動内容

○令和5年度の活動概要

令和4年度は、阪急百貨店の協力を得て、アパレル業界の実態を学びながら作品制作と展示販売を実現した。令和5年度も引き続き、関西圏を代表する阪急百貨店と連携していく。さらに、1月に閉店されたイズミヤ堅田店から売れ残り商品等の提供をいただいていることから、これらの素材の積極的に活用した作品制作に取り組む。また、新たな学生クリエイターの招集し、アップサイクルの価値を高められる企業と大学の共同チームづくりにも挑戦する。

○スケジュール

- 令和5年3～5月 次年度に向けたプロジェクト企画立案，コンセプト計画
- 6月26日 プロジェクト説明会，新規学生メンバー招集
- 8月9日 作品プレゼン・フィードバック①(阪急梅田百貨店担当者参加)
- 9月21日 作品プレゼン・フィードバック②(阪急梅田百貨店担当者参加)
- 9月23.24 成安造形大学ライトギャラリーにてプレ展示会
- 10月25日～11月7日 阪急うめだ百貨店本店にて展示販売会
- 11月～令和6年2月 活動振り返り，まとめ作業

4. 成果と課題、今後の取組

○成果

- ・ アップサイクルをテーマ、学生と民間事業者と連携した服飾やパンフレット等の製品開発
(R4実績：作家22名・29種類, R5実績：作家22名・25種類)
- ・ 店舗から発生する廃棄問題に関して、作品展示会を通じて地域への普及啓発
(R4実績：66点の販売, R5実績：119点の販売)
- ・ 芸大生が大学近隣地域での作品制作及び出展する機会の創出
(R4実績：2会場・計8日間, R5実績：2会場・計16日間)

○考察

- 自分の作品が実際にお金として評価されたことへの喜びを感じている学生が多かった。
- 学外での展示販売という環境で作品の説明をしたり、お客様と会話することで、学生にとって自分の作品を見つめ直す機会となった。
- 実際に店頭での販売を経験し、売る側の立場としての責任感やプレゼンテーション能力の必要性を痛感する学生が多く、商品説明が不十分だったことへの反省も聞かれた。
- 作家としての世界観と、阪急の顧客層ニーズとのギャップを感じた学生も多く、ニーズに合わせたプロダクトを造る必要性にも気づけた。
- 店舗の雰囲気には興味を持たれても入店や購入につながらないケースも多く、作品作りだけでなく店舗空間の重要性まで検討の視野が広がった。
- イベントの時期選びやプロモーションを工夫すれば、さらに良い結果が得られる可能性があるとの意見も出た。

○今後の取組

- 2年の実施結果から、教育的効果や社会性、話題性など関係者それぞれの視点からの価値を整理し、継続的な取り組み体制を整える議論を深めていく。
- 他のクリエイターやお店とのコラボレーションや店頭での実演販売など、新しいアイデアの実装も検討していく。
- イベントの時期やプロモーション計画を見直し、集客力の向上を図る。

No.4

プロジェクト名（活動テーマ）：「手をあげて わたろう」運動啓発のダンスや歌の練習を通して、交通ルールを身につけ日常生活で実践できるようにする 〔SDGs 目標番号： 目標4〕	
提案者	：川副知佐、林 郁子 (びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科 講師)
自治体担当者	：奥井あさみ（東近江市市民生活相談課 係長）
連携大学担当者	：三原宏之（びわこ学院大学 地域・産学連携研究支援課長）
発表者	：川井絢友奈、辻 誠也 (びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科 4年生)

1. 取組体制

本事業は、びわこ学院大学川副ゼミ・林ゼミと東近江市市民生活相談課の連携のもと実施する。

令和4年度にDVD「手をあげて わたろう」を制作した。令和5年度は、市内27園（幼稚園、保育所、こども園）にDVD配布後、園の交通安全教室で学生がダンスの実技指導を行う。また東近江市市民生活課と園主催の交通安全教室で横断歩道の渡り方の実践後、「手をあげてわたる」ことが、どの程度園児に定着しているかを調べる。更に、保護者アンケートを行い交通安全に対する関心についての今後の課題を探る。

2. 背景・目的

東近江市は交通事故のない安全・安心なまちを目指し「横断歩道利用者ファースト運動」を推進している。「手をあげて わたろう」の交通ルールを子ども達が実践し、保護者を含めた大人にも「横断時に手をあげて運転者への意思表示する」意識が高まることにより、市内における横断歩道での交通事故の根絶を目標としている。



交通安全の基礎的な知識や習慣は幼児期から身につけていく必要がある。しかし、幼児期は知識を伝えるだけではなかなか身につけにくい。そこで歌とダンスを楽しむことで子ども達への定着を目指す。令和5年度は、学生が様々な園に出向き実際に子ども達に教えることを通して、子ども達の反応を感じながら、教え方の工夫も行う。

また、園児が横断歩道を渡る様子を観察し、定着度の調査を行う。幼児は保護者の交通安全に対する意識や姿勢からも影響を受けやすいことから、アンケートで保護者の意識調査を行い、今後の課題についての考察を行う。

3. 活動内容

(1) 東近江市内の園での実施

ダンスを体験した園児数（3～5歳児）

4月・・・241名

5月・・・1128名

6月・・・257名

7月・・・199名

9月・・・236名

10月・・・171名



(2) ダンスで啓発を行った行事

5/10 春の交通安全決起大会

—東近江地区交通安全推進会議主催—

6/1 東近江市カンガルークラブ連絡協議会

取り組み発表

10/7 滋賀県交通安全フェア

—県トラック・バス・タクシー協会主催—



4. 成果と課題、今後の取組

園の交通安全教室で多くの子ども達にダンスを通して「手をあげて渡る」大切さが伝えられた。実際に教える場面では、テンポ良くポイントを絞った説明にすることで、子どもの興味関心、持続力に配慮が出来た。多くの子どもは、歌やダンスを見よう見真似でやってみようとするので、教えたところを強調して実践する工夫にも気づけた。

ダンス後の横断歩道を渡る実践で、「止まり、手を上げ、左右を確認する」動作を大人から促されずに出来た園児数は次の通りである。（18園1543名参加・・・止まった（974名）、手を上げた（1106名）、左右を見た（840名））

子どもが習った歌を歌いながら歩いたり、横断歩道を渡る姿も見られ、歌・ダンスの効果が感じられた。後日、保護者アンケートで定着度や保護者の交通安全に対する意識などの調査を行った結果

- ・発達年齢上、衝動的な動きになりやすく、意識の定着が難しい3歳児も、「歌などはふとした時に思い出して歌うことがあるので、渡る場面で声をかけてみようかと思います」
- ・4歳児では「後日、横断歩道で急に立ち止まり、「み〜ぎ、ひだり、さあわたろ〜しましまおうだんはどう〜♪」と歌い出し、左右確認していました。落ち着きのない子どもなのでびっくり&感動しました！」

というアンケート記述も見られた。

保護者アンケートについては、今後考察していく予定である。

No.5

プロジェクト名（活動テーマ）： 「親子で考えよう！今どきのコミュニケーション」 安全なペアレンタルコントロールの啓発活動 〔SDGs 目標番号： 目標 3、目標 4〕	
提案者	：内藤 紀代子（びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科教授）
自治体担当者	：桂 晴樹（滋賀県教育委員会事務局 生涯学習課地域・家庭教育係 社会教育主事）
連携大学担当者	：三原宏之（びわこ学院大学 地域・産学連携研究支援課長）
発表者	：高月流星（びわこ学院大学 BGU 若鮎隊 4 年生 リーダー）

1. 取組体制

本事業は下記のような体制で取り組みを行っている。

安全なペアレンタルコントロールの啓発活動ができるように、滋賀県警のサイバー犯罪対策課のボランティアに参加し、知識とスキルを大学生が習得し、滋賀県教育委員会生涯学習課地域・家庭教育係と連携し、地域や教育機関での啓発に努めた。

2. 背景・目的

近年、子どものインターネット利用が高まり、同時にトラブルの増加も著しい。子ども自身がインターネットの正しい使い方をすることはもちろん、周りの大人たちの理解も重要といえる。そこで本事業の目的を、安全なペアレンタルコントロールの啓発活動とした。

3. 活動内容

実施は図 1 のスケジュールと内容で活動を行っている（図 1）。今年度は、令和 5 年度の活動を予定通りに実施した。

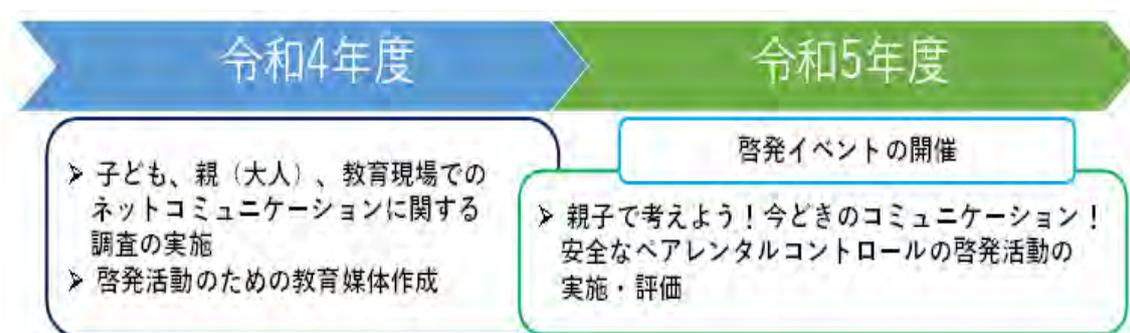


図 1 本事業の活動スケジュール

4. 成果と課題、今後の取組

<R4年度>

教育媒体の作成と滋賀県の指導を2回受け、計692名を対象に4つの教育機関と2つのイベントで啓発活動を実施した。（令和4年度の間接発表にて報告）

<R5年度>

滋賀県警サイバー犯罪対策課による指導・助言と資料提供を受けて、教育スライドのブラッシュUPを行い、4つの教育施設で667名（予定者含む）を対象に教育活動を実施した。

また、すまいるあくしょんフェスタで、啓発リーフレット50枚を配布し、さらに、本大学の紅葉祭にて138枚を配布した。イベントは「カルタで学ぶ親子のためのネット・スマホの賢い使い方」と題し、大学生が作成した巨大カルタを用いたカルタ大会に子ども23名、大人20名が参加した（図2、3）。

今後の予定として、滋賀県教育委員会（長浜市・長浜市家庭教育推進協議会と共催）の「子育て・親育ち語り合い講座」に参加してデジタル世代の子育てについて、大学生の立場からコメントを行う。

令和5年度の活動の詳細（予定含む）	
5月23日	教育活動（近江八幡市内高等学校202名）
7月13日	滋賀県警サイバー犯罪対策課 zoomによる助言・指導、防犯教室用資料の提供
7月19日	教育活動（東近江市内高等学校150名）
9月12日	教育活動（東近江市内高等学校170名）
10月9日	イベント（すまいるあくしょん） 滋賀県教育委員会作成リーフレット配布活動 50枚
11月3日	イベント（紅葉祭）カルタで学ぶ親子のためのネット・スマホの賢い使い方！ リーフレット配布活動 138枚、イベント参加者数 子ども23名、大人20名
11月29日	イベント（子育て・親育ち語り合い講座）デジタル世代の子育てに関しコメント
12月1日	教育活動（東近江市内中学校145名）

図2 今年度の成果の一覧



わ ↓
わからないこと
大人に聞いてネ
相談してネ

図3 教育活動の様子とカルタ大会の様子とペアレンタルコントロールのカルタ

今後の課題としては、教育を受けた子どもやイベントに参加した親子、リーフレットを受け取った保護者が、ペアレンタルコントロールの啓発知識を活用しているのかを検証する必要がある。今後の取り組みとしては、今後の活動では追跡調査（アンケート）を実施し、検証と評価を行うことである。

プロジェクト名（活動テーマ）： 科学館事業に参加をする子どもたちと大学生の関わりの在り方を求めて —大津市科学館とびわこ学院大学との連携— 〔SDGs 目標番号： 目標4 目標5 〕	
提案者	：箱家勝規（びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科教授）
自治体担当者	：武富大空（大津市科学館指導主事）
連携大学担当者	：三原宏之（びわこ学院大学 地域・産学連携研究支援課長）
発表者	：原園秋久（びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科4年生）

1. 取組体制

びわこ学院大学箱家ゼミの3回生、4回生の学生14名および希望する2回生で構成した「科学館プロジェクトチーム」は、科学館事業および学生主体事業「びわ学の学生と科学で遊ぼう」において子ども達が科学にもっと親しめるような楽しい体験に取り組んできた。

事業の推進のためには、大津市科学館の指導主事と緊密な連絡協議を定期的に行い、スケジュール調整、実施の取り組み内容、課題を明らかにして改善を図ってきた。同時に、参加をする子ども達の満足度を高めるために、素材の見方を工夫し、教材研究、事前準備、リハーサルを実施してきた。

2. 背景・目的

大津市科学館とびわこ学院大学は、これまで5年半にわたり「わくわくサイエンス」「サイエンス屋台村」「大津少年少女発明クラブ」「スーパーわくわくサイエンス」などの事業で、学生が講師やサポーターとして子どもが楽しめる科学実験やものづくりの事業に継続的に取り組んできた。大津市科学館は年間4万人あまりの来館者があるが、限られたスタッフのため、科学館ボランティア「チャオ」の協力を得ながら運営をしている。

このような中、将来教員を目指す学生にとって、科学館との連携や来館する子どもたちとの関わりによって多くの学びがあり、それと共に子ども達の楽しめる場の保証が期待される。

3. 活動内容

4月から10月までの学生の活動内容を報告する。

- ① 「わくわくサイエンス」の講師として、科学実験やものづくり活動を7回実施した。
- ② 7月29日（土）大津市科学館の最大事業である「サイエンス屋台村」において「-196℃の世界」というブースを担当し、液体窒素を使った物質の変化を演示し、子ども達に体感してもらった。
- ③ 8月16日（水）～18日（金）の3日間、「びわ学の学生と科学で遊ぼう」というコーナーを展示ホールのサイエンステーブルにおいて実施した。

- ④ 5月から12月まで、年間8回開催される「少年少女発明クラブ」の学生サポーターとして、講師のもとで指導補助を行なった。
- ⑤ 9月16日（土）「スーパーわくわくサイエンス」の学生スタッフとして36名を対象とした小学生向けに「見えてなかったものが見えてくる」というテーマで実施した。2月にも2回目を実施予定。

4. 成果と課題、今後の取組

・コロナによる制限が大幅に緩和され、次第に参加する子どもの数が増えてきている。毎月実施している「わくわくサイエンス」は毎回の子どもの参加者数を16名から20名に、サイエンス屋台村は200名から400名にと関わる子どもの数が増えてきている。子どもと関わる職業を目指す学生にとってその機会が増えているといえる。

・子どもとの関わりの在り方について、学生の視点から次のようにまとめることができた。

① 子どもの反応に注視する。

子ども同士の会話や学生の言葉がけの反応から見えてくることがある。言いっ放し、やりっ放しではなく、常に子どもの反応に注目する。

② 子どもの安全面を最優先する。

液体窒素やはさみ、カッターナイフなど科学実験やものづくりでは、怪我をすることが予想される。年齢に応じた道具の使い方ができるように適切な指導が必要である。常に安全面に対する意識を持つておく必要がある。

③ 限られた時間内に楽しめる活動を考える。

活動は限られた時間の範囲で行うことが約束されている。つくるだけで終わってしまったのでは楽しむことができない。活動の時間内に楽しめる様な工夫が必要である。

④ 子どもの興味関心が高まりそうな内容を用意する。

鳴る、動く、光るなど興味の引きそうな実験や活動を用意しておくことで、子どもと関わりやすくなると考えている。

⑤ 子どもへの言葉遣い、説明の仕方を意識する。

子どもにどんな言葉遣いをしたらよいのか、説明するときには容易な言葉をいかに使うのか、何を図や絵で表現したらよいのかなどよく練っておく必要がある。

⑥ 子どもの支援の仕方を理解しておく。

活動に困惑していたら単に手伝うのではなく、主体的にできるように見本を示したり、そばで見守ったり、支援の仕方は様々であることを意識する。

これまでの学生の活動記録を残しているが、次年度以降の学生への財産となるようにしたい。



No.7

プロジェクト名（活動テーマ）： 余呉の自然をもっと発信して、もっと繋がる～地域振興へ電子顕微鏡の挑戦 〔SDGs 目標番号： 目標 4、目標 11、目標 15 〕	
提案者	： 奈良 篤樹（長浜バイオ大学 バイオサイエンス学部 准教授）
自治体担当者	： 伊藤 真一（長浜市 産業観光部 森林田園整備課）
連携大学担当者	： 熊崎 厚作（長浜バイオ大学 地域連携・産官学連携推進室）
発表者	： 岸 有紗，前田 大地（長浜バイオ大学）

1. 取組体制

長浜バイオ大学・オルガネラ構造機能研究室：活動の統括と運営の全てを担当。

余呉小中学校：6年生が散策と電子顕微鏡観察（大学にて実施）、読み札作成（小中学校にて実施）の取組に参画。

自治体：ながはま森林マッチングセンターや長浜市地域おこし協力隊との協力で、余呉の森林散策ルート作成や提案する森林課題の設定をする。

2. 背景・目的

余呉は、余呉湖や巨木などの自然と、菅原道真生誕の地など歴史が残る。しかし人口減少からこれらの維持と伝承が難しくなっている。そこで地元愛の深い小学生を育てることを目指し、地元の森林を散策し、そこで得たサンプルの電子顕微鏡写真を SNS 発信しグッズを販売する。以上から地域振興の足がかりにする。

3. 活動内容

3-1. (余呉小中学校 4年生対象) 電子顕微鏡操作体験と、3Dプリンタ物への色塗り



余呉小中学校の4年生を対象に、本学設置の走査型電子顕微鏡（日立 S-3400N）の操作体験を行った(5/17)。5月に咲く藤の花粉



を観察した。走査型電子顕微鏡の操作では、初めて見る電子顕微鏡に生徒たちは緊張していたが、熱心に操作していた。電子顕微鏡の部屋は狭いので、生徒を3グループに分けた。電子顕微鏡観察を待つ間を、電子顕微鏡画像折り紙で電子顕微鏡について学ぶ時間に充てた。この花粉の3Dプリンタ物に色塗りをを行い、花粉の色を考えてもらう授業（図工）を行なった(6/21)。自由な色付けをしている生徒も見られた。

3-2. (余呉小中学校 6年生対象) 電子顕微鏡試料取得のための森の散策(11/8)

余呉小中学校の6年生を対象に、余呉小中学校(長浜市木之本町余呉)の裏山を散策し、木の実や枝、サワガニなどを採取した。長浜市地域おこし協力隊(東, 子林)の森の学習指導の下で試料の取得を行なった。取得した試料は、準備したチューブに入れて観察まで保管した。ゴミを拾う生徒もあり、環境学習にもつながる良い散策となった。



3-3. (余呉小中学校 6年生対象) 森で取得した試料の電子顕微鏡操作と観察(11/14)

走査型電子顕微鏡を用いて生徒自身が操作をして写真を撮影した。15分間と観察時間が短かったが、全ての生徒が電子顕微鏡操作を体験できた。取得した試料の思わぬ像に驚く生徒もいた。電子顕微鏡の部屋は狭いので、生徒を3グループに分けた。電子顕微鏡観察を待つ間を、電子顕微鏡画像トランプで電子顕微鏡について学ぶ時間に充てた。



4. 成果と課題、今後の取組

4-1(余呉小中学校4年生対象)電子顕微鏡操作体験と、3Dプリンタ物への色塗り

4月に小中学校と打ち合わせをしてから、5月開催と準備期間が短い中で、4年生に合わせた内容を考えるのが大変であったが、生徒は楽しそうに学んでいた。4年生に電子顕微鏡観察を行う計画は当初なかったが、学校側の強い意向で実現した。4年生では俳句をまだ学んでいないので、その代替となる授業の候補として3Dプリンタ物の色付けを考えた。3Dプリンタは本学の機器を使用した。インク代が高く、今後も続けられるかどうかはわからない。プリンタ物を見た生徒は、観察した花粉を手にとることができて、非常に楽しそうであった。

4-2.(余呉小中学校6年生対象)電子顕微鏡試料取得のための森の散策(11/8)

準備期間が取れたことで、小学校や長浜市地域おこし協力隊との連携がうまく取れて余呉小中学校の裏山を試料採取場と出来た。この山は、生徒が4年生の時に今回来た地域おこし協力隊と登ったこともあって、再会を喜ぶ生徒も多数おり、学年の連携の取れたと考え、来年度以降も引き続き行なっていきたい。

4-3.(余呉小中学校6年生対象)森で取得した試料の電子顕微鏡操作と観察(11/14)

生徒が取得した試料を全て見るができなかったことが反省点である(昨年度は持参した試料の95%の観察率、今年度は55%)。交通等の事情で大学への到着予定時刻が遅れ、電子顕微鏡観察時間が短くならざるを得なかった事情もあるが、観察に十分な時間を取ることが今後の課題である。

4-4. 今後の取り組み

- ①11月27日(月)に余呉小中学校にて、電子顕微鏡画像を用いて俳句を詠む授業を行う。
- ②電子顕微鏡画像を取りまとめて、SNS芸術サイトに投稿し、Tシャツやアクリルボード等のグッズを制作し販売する。

(このページは白紙です)

プロジェクト名（活動テーマ）： 地域イベント「コトナリエサマーフェスタ」における、親子イルミネーションづくり ワークショップ [SDGS 目標番号：目標 7・目標 11]	
提案者	：和田健一（びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科講師）
自治体担当者	：竹内清臣（東近江市役所湖東支所 主査）
連携大学担当者	：三原宏之（地域・産学連携研究支援課 課長）
発表者	：宮 光希（びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科 3 年生）

1. 取組体制

- びわこ学院大学和田ゼミにおいて、造形表現を研究課題とする 3 回生 6 名を中心に、親子でつくるイルミネーションづくりのワークショップを企画・運営する。この活動は、前任教員の頃から 10 年以上続けて取組んできた活動でもある。
- コトナリエ実行委員会（東近江市商工会湖東支部青年部、湖東地区まちづくり協議会）と連携しながら、ワークショップ当日の運営を行い、完成したイルミネーションは、後日、コトナリエ会場に設置され、期間中点灯される。
- 制作されるイルミネーションは、その内容・制作方法の検討・材料準備などすべてを学生が行う。

2. 背景・目的

コトナリエは、地域住民の方々に再生可能エネルギーや地域環境への関心を深めていただくことを目的として開催され、また、設置されるイルミネーションは、各家庭から提供された廃食油を精製したバイオ燃料を使用し、灯されている。

このイルミネーションづくりワークショップも、コトナリエの中にあって、幼児・児童とその保護者を交えた親子活動として開催するものであるが、再生可能エネルギーや地域の環境、住みやすい街づくりなどについて関心を深めていただくことを目的としている。また、題材の設定から子どもたちへの指導方法を考え、ワークショップ当日参加者への指導をはじめとする運営全般に関わる事が、本学で教育や福祉を学ぶ学生にとって貴重な実践力を養う場となっている。

3. 活動内容

(1) コトナリエ実行委員会・事前の研修

- ①5月8日（月）
 - ・コトナリエ実行委員会実行委員長、イルミネーション担当者来学。
 - ・今年度のおおよその日程について、参加者募集ちらしなどについて打合せを行い、6月4日（日）の廃油回収作業の見学を依頼する。
 - 同時に、「あいとうエコプラザ菜の花館」において、「菜の花エコプロジェクト」研修の受講を依頼する。
- ②5月17日（水）
 - ・ひばり公園 みすまの館下見（ワークショップ会場）
- ③6月4日（日）
 - ・廃食油回収作業見学（湖東体育館）
 - ・あいとうエコプラザ菜の花館で廃食油の精製過程見学
 - その後、学内にて題材研究、材料集め、指導法研究などをワークショップ当日まで継続して行う。



廃食油精製過程見学

(2) ワークショップ当日～

- ①7月1・2日(土・日) ・池庄町ひばり公園 みすまの館においてイルミネーションづくりワークショップを開催する。



ワークショップの様子



- ②7月5日(水) ・イルミネーション設置作業
雨天のため途中で中止し、残りは後日とする。
- ③7月7日(金) ・設置作業を完了し、コトナリエ本番を待つ。



子どもが制作したイルミネーション



コトナリエ全体会場

- ④7月7日(金)以降 ・保護者に向けて実施したアンケート調査の集約とまとめの活動。

4. 成果と課題、今後の取組

- コトナリエは20年を一区切りに最終回を迎えた。本学は、10年以上このワークショップの依頼を受け取組んできたが、学生にとっては、子どもや保護者を前にしての実践的な学びの場でもあり、自らのエネルギー資源の再利用や地域環境保全についての意識向上につながる大切な活動の場でもあった。
- 親子でイルミネーションづくりを楽しむ姿が見られ、また、他のテーブルのご家族とも打ちつけて活動している様子もあり、家族や地域住民同士のつながりを深める一つの機会にもなっていた。
- コトナリエ会期中の点灯されたイルミネーションを見て喜ぶ子どもの姿があり、子どもの想像力や創造力、豊かな感性を育むための大切な活動であることが実感できた。
- アンケート結果などから、再生可能エネルギーや地域の環境保全に関心を持っていただく一つの機会になったと考えられる。また、アンケートは保護者が対象であるが、このワークショップを通じて、これからの時代を創っていく幼い子どもたちの心の中に灯るであろう何かしらの「灯(ともしび)」を灯せたのではないかな。
- コトナリエは今回を持って終了する。
今後、「子どもと表現活動」の関係性を探りながら、地域と連携した次なる活動を考えていかなければならない。

No.9

プロジェクト名（活動テーマ）：博物館の収蔵資料・展示事業を子どもたちに役立てるための、学生参画と道徳科・社会科の地域教材作成 〔SDGs 目標番号：目標 4 すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する〕	
提案者	：和田充弘（びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科准教授）
自治体担当者	：上平千恵（東近江市近江商人博物館館長）
連携大学担当者	：三原宏之（びわこ学院大学 地域・産学連携研究支援課長）
発表者	：赤羽 峻 黄瀬夏輝 谷北努夢 （びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科 3 年生）

1. 取組体制

びわこ学院大学の和田充弘ゼミに所属する学生が、おもな活動に従事していく。

提案者は東近江市近江商人博物館所蔵、時習齋蔵書の調査研究をもとに、令和4年4月から同5年6月にかけて計6回、びわこ学院大学と同館との共催展示「善く学び、共に生きるために—東近江の教育・福祉遺産をたずねて—」の実施に携わった経緯を踏まえ、教育学・教育史研究者、教職課程関連授業担当者の立場からゼミ生への指導・支援を行う。

東近江市近江商人博物館は当プロジェクトの遂行に機会を提供し、専門的な見地から指導と助言を行う。

2. 背景・目的

東近江市の博物館では、これまで子ども向けの事業に取り組んできた。同市の小・中学校では、学習指導要領に即し、道徳科・社会科のオリジナルな地域教材の使用が有効である。教育学、教職課程を専攻する学生については、歴史学専攻の学生とは異なる形で、歴史系博物館と協働し、自身の学びを地域の子どものために生かしていく可能性が開かれている。

そこで今回、びわこ学院大学の学生は、東近江市近江商人博物館の年間計画に従い、①ボランティアとして展示、解説、広報などの補助に携わる。②館蔵資料と展示事業を活用して地域教材の研究と作成を行い、その成果を冊子にまとめ関連諸施設に配布し、WEB上で公開する。

3. 活動内容

- ① 平成5年4月、5月に、準備段階として、東近江市近江商人博物館と西堀榮三郎記念探検の殿堂を見学し、その後、東近江市近江商人博物館の常設展示について、子どものためにどのようなアイデアが考えられるかを各自レポートにまとめ、ゼミで報告した。
- ② 同年7月15日から8月31日に開催された、同館の夏季企画展「東近江発、個別最適な学びは寺子屋から—往来物を手がかりに—」にあたり、展示パネルの一部につき、そのイラスト部

分の作成を担当した。

企画展期間中の8月19日には、関連イベント「郷土食を食べながら一湖国のヒミツ― 近江商人を生んだ五個荘の寺子屋」において、学び舎木火土金水主催、宿泊施設壽星丸での講演会場の設営を手伝い、ギャラリートークでは、教育および地元企業の関係者をはじめとする参加者との交流をはかることができた。

- ③ 地域教材の研究と作成に必要な、教育学・教育史の基礎的な知識を習得するための一助となるよう、ゼミでは汐見稔幸、大田堯の著書をテキストに選び、発表と指導を続けている。

またゼミ生は全員、9月に小学校での教育実習を済ませることができたが、これも本事業に資するところがあると考えている。



探検の殿堂を見学



夏季企画展の展示パネル作成

4. 成果と課題、今後の取組

- ① 博物館での見学や展示補助、イベントでの参加者との交流によって、博物館の教育史関連を含む歴史資料や五個荘の地域社会に親近感をもち、教師および子どもの視点からのアプローチをはかることができるなど、基礎的な体験を積むことができた。

地域教材の研究と作成に向けては、まだまだ実力不足であり、博物館その他諸機関の助言を仰ぎながら、その改善につとめたい。

- ② 地域教材の具体的な内容については、上記の夏季企画展をうけて、その図録を兼ねたものを考えている。対象については小・中学校のどこに絞るか、検討中である。図録にとどまらず教材に仕上げるため、資料の選定、説明の内容と表現、全体の構成、ねらいの絞り方について、慎重に作業をすすめていきたい。

- ③ 子供向けのワークショップをはじめとする博物館主催の行事については、ボランティアとして積極的に参加し、子どもとの交流の中で、学生としての学びを深めることをめざしたい。

プロジェクト名（活動テーマ）： 誰もが使いやすい交通環境実現に向けたリ・デザイン 〔SDGs 目標番号： 目標 3、目標 11 〕	
提案者	: 逢 軍（パン ジュイン） （びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科 教授）
自治体担当者	: 山本享志（東近江市都市整備部公共交通政策課 管理監）
連携大学担当者	: 三原宏之（びわこ学院大学 地域・産学連携研究支援課長）
発表者	: 木村圭吾（びわこ学院大学教育福祉学部 3 年生 地域調査プロジェクトチーム サブリーダー）

1. 取組体制

・びわこ学院大学

調査及び研究設計、フィールドワーク及び聞き取り調査実施、結果の取りまとめ、データ分析

・東近江市都市整備部公共交通政策課

調査及び研究設計、地域交通に関する基礎データの提供及び地域住民組織との調整役、調査協力、データ分析

2. 背景・目的

東近江市では、最上位計画である東近江市総合計画において、公共交通の維持・充実を図り、便利で満足度の高いまちを目指すという目標を掲げている。この目標を具現化するためのマスタープランとして「東近江市地域公共交通計画」を令和 4 年 3 月に策定し、令和 13 年度までの 10 年間で取組むべき具体的な施策を掲げ、取組を開始したところである。

東近江市では、来るべき超高齢社会を踏まえて、高齢者をはじめとする交通弱者や増加する在住外国人等にとって分かりやすく、使いやすい公共交通利用環境の整備が求められている。

本研究では、路線バス・コミュニティバス（ちょこっとバス、ちょこっとタクシー）といった地域公共交通に着目し、誰もが使いやすい公共交通利用環境の整備を目指し、「①路線バス・コミュニティバス（ちょこっとバス、ちょこっとタクシー）の停留所のリ・デザイン」、「②ちょこっとタクシー停留所の配置基準の見直し」について研究するものである。

3. 活動内容

・令和 5 年 6 月 28 日 第 1 回ミーティング

市担当者から学生に対し、地域公共交通の現状、調査研究概要の説明を行い、今後の研究計画を確認した。

・令和 5 年 7 月 26 日 事前研修

びわこ学院大学短期大学部健康福祉コースの山ノ井講師（専門：社会福祉学、介護福祉学）から「高齢者の生活と特徴」について講義をしていただいた。また、高齢者キットを装着し、高齢者の歩行でどのような苦労があるかなどを体感した。講義と疑似体験を通して、交通弱者と言われる高齢者に対してどのような点について留意すべきかを学ぶことができた。

併せて、今後のフィールドワーク地域について検討し、ちょこっとバス、ちょこっとタクシー、近江バスが運行している愛東地区でフィールドワークを実施することとした。

- ・令和5年8月28日 第一回フィールドワーク
ちょこっとタクシー、ちょこっとバス愛東線に乘車し、各停留所の配置場所を確認し、11月に行うフィールドワークに向けて、重点的に確認すべき点などを確認した。
- ・令和5年10月18日 ワークショップ
第一回フィールドワークを踏まえ、第二回フィールドワークでの重点調査項目等について整理を行った
- ・令和5年11月8日 第二回フィールドワーク
10月のワークショップで整理した調査項目に基づき、愛東地区内の各停留所の状況を二班に分かれ調査を実施した。
- ・令和5年11月16日 第三回フィールドワーク
停留所のデザインや配置基準の参考とするため、愛東地区の高齢者を対象にちょこっとバス・ちょこっとタクシーの利用や停留所の時刻表の見やすさなどについてアンケート調査を実施した。



2023年6月28日ミーティング



山ノ井先生による講習会



高齢者キットで体験



1回目のフィールドワーク



ワークショップ



2回目のフィールドワーク

4. 成果と課題、今後の取組

フィールドワークを3回実施したことにより、停留所標識のデザインが統一されていないなどの課題があることが分かった。また、バス停の標識が片側1か所にしかないものもあり、道路事情など様々な要因があることも分かり、統一したデザインに整理しつつも、道路状況に合わせた標識を作成する必要があることが分かった。

これらのことを踏まえ、標識のデザインを検討するとともに、停留所の設置基準について具体的議論を進めていきたい。

No. 11

プロジェクト名（活動テーマ）： 大津市無形民俗文化財「大津絵踊り」の3Dデジタル化プロジェクト 〔SDGs 目標番号：4、11、17〕	
提案者	：滋賀短期大学 デジタルライフビジネス学科
自治体担当者	：大津市・市民部文化振興課課長補佐・白井孝明
連携大学担当者	：滋賀短期大学 デジタルライフビジネス学科 学科長 特別教授 小山内幸治・専任講師 小笠原寛夫
発表者	：滋賀短期大学 デジタルライフビジネス学科 2年天野翔・1年久保田大智

1. 取組体制

滋賀短期大学デジタルライフビジネス学科学生：プロジェクト実施の中心組織であり「大津絵踊り」を3D化しデータ保存・公開するプロジェクトを担う。学科長・特別教授小山内と専任講師小笠原がアドバイザーとなっている。

大津市役所：プロジェクトの協働組織。本プロジェクトへの助言、評価、伝統文化継承におけるデジタル化の意義の広報を担当する。

大津絵踊り保存会：本プロジェクトの対象。情報提供、データ収集への協力、助言、評価を担当する。

2. 背景・目的

大津市無形民俗文化財「大津絵踊り」は、三味線と謡いに合わせて踊るもので、大津花街で江戸後期発生し、幕末から明治にかけて全国的に流行した「大津絵節」に、踊りを付けたものである。かつては、大津の名物であった。「大津絵踊り」は、10種の「面」と、5種の小道具を用いて行われるのが特徴である。この「大津絵踊り」を保存するために、昭和63年から、保存会を立ち上げ保存に取り組んでいるが、後継者が十分には育っておらず、未来に向けての保存が課題となっている。現在、踊りを継承している方が5名おられるが、そのうち2名は高齢のため、実際に踊れるのは3名である。「大津絵踊り」は、最低でも3名の演者が必要であるため、大津絵の継承・保存問題への取り組みは、急務であるといえる。

本プロジェクトでは、踊りをモーションキャプチャーし、デジタル化により3D空間で踊りを再現することで、「大津絵踊り」の恒久的な保存に取り組むことを目的としている。

3. 活動内容

本研究は、以下のような手順で行われる。

①「大津絵踊り保存会」に協力を得て、大津絵踊りを多角的にビデオ撮影する。②ビデオ映像をもとに、骨格検出、モーションキャプチャーを行う。③人物の3Dモデルを作成④キャプチャー

データをもとにUnity空間に、上記3Dモデルで動作のみを再現⑤大津絵踊りで使う「面」の3Dモデルを作成⑥3Dモデルにテクスチャーと面の貼り付け⑦動作確認、修正⑧インターネット上で公開、広報を行う。

現時点では、前述の①と②および⑤に取り組んでいる。

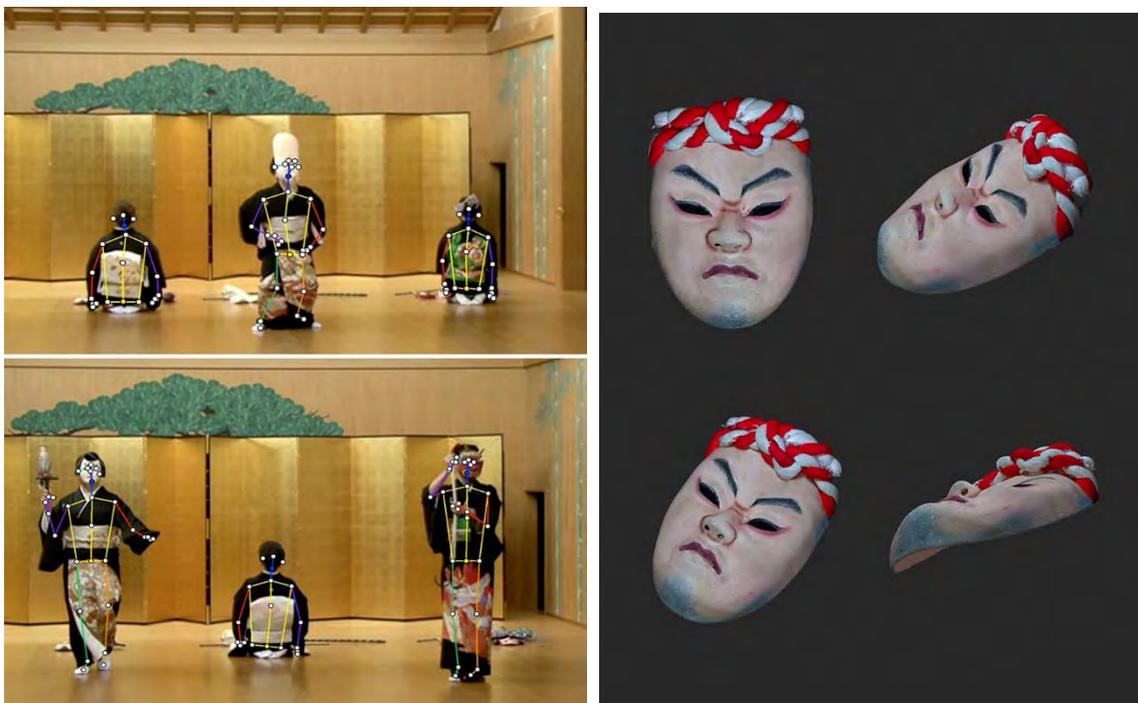


写真1 骨格検出とモーションキャプチャー

写真2 「面（釣鐘弁慶）」の3Dデータ化

4. 成果と課題、今後の取組

これまでの成果としてはビデオから骨格検出し、モーションキャプチャー化することが可能であることが確かめられたこと、「面」や「小道具」の3Dデータ化も可能であることが確かめられたことが挙げられる。

課題としては、現在行っているビデオからモーションキャプチャーデータを生成する方法では、奥行き的位置データは検出できない。これを検出するためには、カメラ2台を演者の正面と横において、リアルタイムで骨格検出とモーションキャプチャーを行う必要がある。また、人物の重なりがあると後ろの人物の動きをキャプチャーできないため、一人一人別にデータを取る必要があることが分かった。また、和服を着て演技している状態では、膝、足の関節の位置を特定できない場合があるため、データを取る際、運動着など関節の位置が特定しやすい服装で演技してもらった必要があることが分かった。

今後の取り組みとしては、取り組み1年目の今年度中に、踊りのモーションキャプチャー化と、すべての「面」「小道具」の3Dデータ化を終えたいと考えている。

また、「面」の傷みも見られることから、3D化した、「面」のデータから、3Dプリンタで「面」の再現を行うことにも挑戦してみたいと考えている。

No. 12

プロジェクト名（活動テーマ）： 山間部に暮らす高齢者とともに考える LIFE ～健康いきいき作業療法プロジェクト～ 〔SDGs 目標番号： 3 〕	
提案者	： びわこリハビリテーション専門職大学 作業療法学科 助教 木岡 和実
自治体担当者	： 東近江市長寿福祉課 参事 脇 美早子
連携大学担当者	： びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター センター長 代理 岩崎 康司
発表者	： びわこリハビリテーション専門職大学 作業療法学科 2年 田邊 大智 2年 伊與田 裕司

1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学作業療法学科の教員および学生、東近江市長寿福祉課と共同で行う。

【役割分担】

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

- ・ 住民の生活評価と課題解決に向けた取り組み
- ・ 作業療法学科学生（1～3年生）及び教員によるミニレクチャーや作業活動
- ・ 活動の広報

東近江市長寿福祉課の役割

- ・ 地域課題に関する情報提供
- ・ 住民の生活評価への直接的関与
- ・ 課題解決に向けた助言と実践

2. 背景・目的

山間部である永源寺地区は市街地の地域特性と比較しても生活環境の厳しさがあると予測される。加えて、高齢者の老化に伴うフレイルの影響を鑑みれば種々の生活課題が生じていると考えられる。また一方では、食生活や生活習慣によって市街地住民に比べ健康が維持されているといった報告も散見される。

そのため本事業では、市内永源寺地区における高齢者に対して様々な作業活動やインタビュー、住まいの様子に伺うことなどによる関わりから日々の日常生活について評価を実施し、地域課題を捉え直すことを初年次の目的とする。また抽出された課題を考察し、解決策を実践することを2年次の目的とする。

3. 活動内容

※事業開始が遅延したこともあり、初回となった9/30の取組を報告する。

○場所

東近江市黄和田町（集会所）

○対象

従来から実施されているサロンに参加し、初回の約15名の高齢者（男性2名/女性13名）を対象とした。

○実施内容（写真参照）

自己紹介と事業説明（教員A）

昨年度までの能登川や八日市で実施した事業について紹介し、今年度からの趣旨について説明した。

びわこ脳トレ体操の実施（教員B・学生）

手足の体操を学生とともに行った。学生らは参加者の座席に沿いながら、共に談笑しつつ進行していった。

談話会（学生・教員）

参加者全員を4つのグループに分かれ、細かな自己紹介とともに黄和田町での暮らしについてお聞きした。



4. 成果と課題、今後の取組

今回の大きな目的としては、黄和田町住民さんの生活を知ることにあつた。体操などの関わりはアイスブレイクの意味を持ちながら、スムーズに談話会を行うことができた。

談話会では個人の生活や、黄和田町内の人の繋がりについて様々にお聞きすることができた。談話内容は学内で教員学生と共有しテキストにまとめた。そのプロセスの中では、地域文化、子世代と親世代の役割、不自由であっても健康的な考え方を持つ姿勢について気づきを共有することができた。そしてこれに呼応するように学生自身から新たな疑問が抽出され、次回の関わりに向けたテーマとなっている。

今後の取り組みでは引き続き生活評価を継続する方針である。また同意を得た形で住民宅に赴く機会をいただき、暮らしについてさらに詳細に把握できる取り組みを予定している。これらの交流による観察や聴取内容にもとづいて、地域課題を共に検討し、来年度から解決策として実践できるように進めていきたい。

<p>プロジェクト名（活動テーマ）： いきいき生活プロジェクト 2023-24 ～体力チェックで健康寿命を延ばしましょう～ 〔SDGs 目標番号： 3 〕</p>
<p>提案者：組織・団体名：びわこリハビリテーション専門職大学 理学療法学科 代表者の役職・氏名：理学療法学科 学科長 山内 正雄 理学療法学科 准教授 宇於崎 孝 理学療法学科 講師 植田 昌治</p>
<p>自治体担当者：自治体・所属：東近江市健康推進課(保健センター) 役職・氏名：主幹 木下 幸代</p>
<p>連携大学担当者：大学・所属：びわこリハビリテーション専門職大学事務センター 役職・氏名：センター長代理 岩崎 康司</p>
<p>発表者：びわこリハビリテーション専門職大学 理学療法学科 3年 内田 滉平</p>

1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

- ・講座の講師、体力測定、体操指導及び運営・・・理学療法学科教員及び学生
- ・講座の広報

東近江市健康推進課の役割

- ・講座の講師、助言指導
- ・受講対象者の抽出、案内送付

2. 背景・目的

東近江市の人口は緩やかに減少しているが、逆に65歳以上の高齢者人口は増加し、2025年には高齢化率が28%になると推計されている。そして高齢者の独り暮らし世帯は、2015年には3339世帯であったが、2020年には3760世帯に増加している。独居の高齢者は自宅に閉じこもりやすく、その結果身体機能や認知機能が低下し、フレイルの状態になりやすいと考えられている。そのため、フレイルを予防して、活動性や認知機能を維持・改善していくことが重要となる。

フレイル予防のためには、骨折や転倒予防につながる運動機能の維持・改善だけでなく、呼吸・循環機能の維持・改善も重要となる。そこで、昨年までの体力テストに加えて、筋肉量や簡便な呼吸・循環機能の測定を行い、「びわこいきいき体操」指導に加えて、栄養指導や呼吸・循環器のトレーニングを行うことで、活動性のさらなる向上を目指す。

3. 活動内容

- 第1回 6月 3日 体力テスト、呼吸・循環機能測定と「びわこいきいき体操」の実施
 - 第2回 7月 1日 体力テストなどの結果報告とミニ講座と「びわこいきいき体操」の実施
 - 第3回 7月 29日 フレイル予防と吹き戻しの講義と「びわこいきいき体操」の実施
 - 第4回 9月 30日 体力、呼吸・循環機能測定②と「びわこいきいき体操」の実施
 - 第5回 11月 18日 体力テストなどの結果報告とミニ講座と「びわこいきいき体操」の実施
- 以下は今年度の今後の予定
- 第6回 12月 9日 フレイル予防と栄養についての講義と「びわこいきいき体操」の実施
 - 第7回 2月 10日 体力テスト、呼吸・循環機能測定と「びわこいきいき体操」の実施
 - 第8回 3月 2日 体力テストなどの結果報告とミニ講座と「びわこいきいき体操」の実施

体力測定を6月、9月と2回、学生と共に実施。夏の間は実施を控えた。健康や体力維持に関するテーマで毎回講義と体操を行い、参加者の意識の向上に努めた。呼吸機能や自律神経の状態についても測定し、自身の身体状況についての理解を深められるような測定を実施した。

結果から検討した事

6月に1回目、9月に2回目の体力測定を実施して、夏を超えての体力の変化を比較した。2回とも参加していた23名（男10、女13）のデータを用いた。

6月時点の基礎チェックシートの結果より、「該当」が4～7をプレフレイル、8以上をフレイルとして両者を「フレイル群」、3以下を「非フレイル群」として、群ごとに6月と9月の体力測定結果を比較した。

結果:非フレイル群の片脚立位が、6月と比べて9月で有意に低下(遅くなっていた($p < 0.001$)). その他の項目は月の比較で有意な変化がなかった。フレイル群は大きな低下も改善もなかった一方で、非フレイル群の参加者の片脚立位の増減が大きく、3か月の間にどのようなことがあったのか、聴取すべきと考えられる。また基礎チェックシートの該当項目からさらに群分けして、詳細に検討する必要がある。

4. 成果と課題、今後の取組

フレイル予防のために、体力・筋力の維持改善が必要と説明しているが、夏季の間には「びわこいきいき体操」などの体力維持のための方策を実施していない可能性が考えられた。今後、年末・正月の冬季をはさんで、2月初旬に体力テストを実施予定であるが、さらに体力の維持・改善の必要性を理解していただき、次年度以降の事業につなげていきたい。



12 つくる責任 つかう責任

モノがめぐる、
オモイがめぐる。

SDGsワークショップ



滋賀のサーキュラーエコノミーの実践



参加者募集 | 2023.6.5 → 6.30

民泊を拠点に資源循環を実体験!

滋賀県東近江市のNPO法人愛のまちエコ倶楽部の活動や、菜の花館での体験、奥永源寺の特産品「政所茶」の生産現場での体験を通じて、資源循環型の地域づくりを学びます。東近江市の民家(農家)をリノベーションした宿泊施設「だれんち?」を拠点に、参加者同士での交流を深めながら1泊2日の研修を通じて相互に企画アイデアを考える機会とします。



あいとうエコプラザ菜の花館



だれんち?

チームで新たな企画を考える!

「滋賀のサーキュラーエコノミーの実践」をテーマに、各大学からの参加学生で複数チームを編成し、活動を行います。滋賀県内無印良品の店長を講師に招き、SDGsの取り組みを学ぶとともに、SDGs12の「つくる責任使う責任」を実現するための新たな企画を考えます。

オンライン説明会開催!

参加を検討している方を対象にオンライン説明会を実施します。

日時 2023.6.20(火) 18:30-19:00

当日参加できない場合も、後日説明会動画を共有しますので、申込をしてください。

申込 6.19(月)正午までにお申し込みください。

説明会への
申込はこちら

学習・現場体験

東近江市の資源循環型の地域づくりを進める拠点をめぐり、菜の花館での体験や政所茶の生産現場での体験などを通じて、地域内の資源循環を身近に実感します。



アイデアワークショップ

滋賀県内無印良品店舗が取り組む資源回収の認知向上および参加促進のアイデア、使わなくなった商品を消費者自身が再利用するアイデアを考えます。



成果発表

本ワークショップにおいてチームで考えたアイデアを、無印良品の担当者の方に向けて発表します。

詳細なスケジュール・開催場所は募集要項をご確認ください。

活動期間

2023年9月

※日程詳細は募集要項をご参照ください。

募集人数

16名

※応募者多数の場合選考あり

活動拠点

滋賀県内での対面活動、またはZoomを活用したオンラインでの活動

応募資格

全学年対象

- メンバーと協力して積極的に取り組み、最後まで責任感を持って活動できる方。
- 全ての9月の活動日程に参加できる方。
- ※やむを得ない理由により参加できない日程がある場合は考慮します。

申し込み方法

所定の応募申込書をご記入の上、各大学の担当窓口へご提出ください。提出方法は各大学によって異なります。詳細は募集要項をご確認ください。

募集期間 | 2023.6.5(火) → 6.30(金) 13:00まで

活動支援

宿泊費、宿泊体験時の現地移動費については無料(自己負担なし)とします。

ただし、自宅等から現地までの交通費、食費(約3,000円)、銭湯入浴料(約500円)は各自の負担とします。

活動にあたって、各大学の学生支援事業担当者または協力企業・スタッフから適宜助言等を行います。